



Title	民国後期地方政府の近代化建設研究：福建省と台湾省における陳儀の施政について [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	湯, 武; Tang, Wu
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(法学)
Dissertation Number	甲第12930号
Issue Date	2017-12-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/68133">https://hdl.handle.net/2115/68133</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Wu_Tang_abstract.pdf, 論文内容の要旨



## 学 位 論 文 題 名

### 民国後期地方政府の近代化建設研究

#### ——福建省と台湾省における陳儀の施政について——

#### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、陳儀の人生を追跡しながら、福建省と台湾省における陳儀の施政を考察するものである。

それを通じて、三つの目的を達成しようとする。第一に、陳儀が国民政府に入るまでの経歴を考察して、その学歴、能力及び人脈などを解明することである。その経歴の考察によって、国民党とほぼ無縁だった陳儀が、なぜ蒋介石に重用されたのか、特に、それまで福建省と台湾省と全然関係がなかった彼は、なぜ「福建事変」と日中戦争の後、それぞれ大きな権限を持つ福建省省主席と台湾省行政長官に任命されていたのかを明らかにしようとする。第二に、両地域における陳儀の近代化建設を分析することである。特に陳儀はいかに自分の人脈を利用して、福建省と台湾省において近代化建設を行なったのかを解明しようとする。第三に、その陳儀の近代化建設の成功と失敗を分析することによって、民国政治史における陳儀の意味を明らかにしたい。

陳儀は、清末の 1883 年に生まれ、故郷の中国浙江省で当時中国に導入されたばかりの西洋式の中等教育を受けた後、日本留学に赴き、約 10 年間の軍事教育を受けた。その後、帰国した彼は、辛亥革命に積極的に参加しながら、革命後に成立した袁世凱政府の軍事顧問を務め、さらに、北洋軍閥の孫伝芳の部下になりつつも蒋介石に投じ、国民政府の福建省主席、初代台湾省行政長官兼警備総司令を務めつつも二・二八事件で失脚し、その後浙江省主席となったものの共産党と通じて処刑されるという数奇な人生を生きた。

陳儀の経歴の中に極めて目立つことは、彼の青年時代の日本軍事留学である。彼は、清末において予備校の成城学校と振武学校、陸軍陸上測量部修技所、陸軍士官学校、及び陸軍野戦砲兵学校で約 10 年間で留学し、また、1917 年から 1919 年まで、日本陸軍の最高軍事学校である陸軍大学校の第一期中国人留学生として、軍事教育を受けた。清末から民

国初期にかけての日中軍事交流において、陳儀は、最も濃密な交流を体験し、それ故に日本理解を深め、日本の軍人らとの人脈を作った。その軍事交流の具体的事例を明らかにする意味で、陳儀は大きな意味がある。

また、陳儀は民国前期においても南京国民政府に入った初期においても、自分の経験、学識、能力及び人脈を活かし、有能なテクノクラートとして重用された。特に 1930 年代に入り、日中間の緊張が高まった時に、軍政部政務次長を務めた陳儀は、日本通として、国民政府の対日外交に参加した。

福建・台湾は日本の中国侵略にとって、満洲・華北と共に重要なルートである。1933 年 11 月、地方軍閥による反蒋介石の政権独立活動である福建事変が発生した。福建省は、台湾の対岸地域でありながら、清末から日本の大陸拡張の重点地域になった。福建事変において台湾軍や台湾総督府などの日本勢力が事件の発生に促した。福建事変を鎮圧した後、陳儀の来歴と政治力が果たす役割を重視したため、蒋介石は陳儀を福建省省主席に任命した。陳儀の福建施政は、日本の台湾開発を学び、有効的な行政システムを構築して政治・経済・社会の改革を推進して福建省における国民政府の統治基盤を固め、また日中戦争の勃発まで日本の台湾総督府・台湾軍と良い関係を維持して不用意に日本の中国侵略を招かないようにした。

カイロ会議で戦後台湾の中国復帰に対する米英の支持を得た国民政府は、台湾接收準備工作の担当機構を設立し、日本通でありながら、福建施政期に台湾視察を行なった陳儀はその部門の責任者を兼任させた。一方、彼は国民政府の高級幹部を養成する部局の指導者をも務めた。その結果、陳儀は台湾接收の計画作成と人員養成を主導した。そして、日本の敗戦に従い、陳儀は戦後台湾の初代行政長官になり、台湾施政を実行した。

陳儀の福建・台湾施政は、台湾を基地として、福建・華南地域を主要対象とする日本の中国侵略の南ルートに対する国民政府の対抗ないし反撃を示したのである。その意味で、日中関係史・日台関係史を理解する上で、陳儀を理解することは不可欠なのである。

陳儀は、政治にしても経済にしても「公」と「私」の区別を重視し、「公」を最高の価値とし、また「公」を代表する国家に集権させ、さらに国家による経済開発という統制経済を主張した。

ウェーバーの国家理論が指摘したように、近代国家の官僚制は、効率や「公」のために、職員の募集と任用について、個人的関係に左右されないことを内在的に要求される。陳儀もそのような認識を持っていたし、福建・台湾施政においても中国の伝統的な人治や、ブ

ローカー、個人的関係などによる権力形成とその運用などを打破することを意味する「近代化」建設を推進しようとした。しかし、近代化を実現するための陳儀の政治行動は、逆に中国の伝統的方法に担保されていた。陳儀は、血縁、地縁、留学縁、職場縁など、現代中国にも通ずる個人的関係に基づき、自らの権力基盤作りを着々と行った。

その結果、彼が重用した側近は、その集権体制と統制経済を利用して自己利益を求め、腐敗問題などが多発した。また、国民政府内の他派閥と地方社会の土着勢力は陳儀の施政に反対して対立問題が深刻化にさせた。特に台湾施政に際して、日本の植民地支配に蓄積された膨大な近代経済開発の成果を接收したため、その腐敗問題と対立問題がより厳しくなった。結局、二・二八事件のような反陳儀政府の大規模な騒乱が発生し、陳儀の免職をもたらした。

そのような陳儀施政の失敗、特にその統制経済が引き起こした問題から教訓と経験を学習して、1950年代以降の国民党政権は、台湾で国家権力を増強し、市場経済向けの政策を採用して経済発展を実現した。その意味で、陳儀の台湾施政は逆方向で国民党政権を固めることに役立った。

一方、陳儀と同じく統制経済を主張した多くのテクノクラートは、毛沢東時代の中華人民共和国にも重用され、計画経済の実施に尽力した。しかし、衆知のように、毛沢東時代において中国は大きな経済的な失敗を喫した。鄧小平の市場経済向けの改革開放政策の実施に従って、中国は高度成長を実現した。このような1950年代以来の中国大陆と台湾の政治・経済史を考察すると、陳儀の福建・台湾施政は、当然ながら先駆的な意味を持っているし、より掘り下げるべきである。

陳儀は、民国期における中国の重要な政治家であり、浙江省の裕福な家庭に生まれた出自に加えて、近代日本への度重なる留学を含めた自らの経歴によって豊富な人脈を構築し、それを活かして自分の福建・台湾施政において、中国の近代化建設に力を尽くした。

彼の福建と台湾での施政は、成功・失敗に満ちている。近代的な政治システムの構築から言うと、政治的な集権と経済的な統制の組み合わせをつうじて、陳儀による福建での成功は南ルートによる日本の大陸進出を抑えた一方、同じ方式による台湾統治の失敗は、国民党政権のなかで反省材料となり、その台湾統治に活かされたことにより、結果的に国民党政権の地歩を固めることに役立った。いずれも、陳儀の政治的な人生を追うことが、民国政治史と近代日本政治外交史において意味を成すゆえんである。